

令和2年が始まりました。本年が、皆様にとって実り多い一年になりますよう、心より祈念いたします。

さて、昨年は元号が平成から令和へと代わり、時代の移り変わりを感じる年でもありました。PFに関連しては、PFの建設期と黎明期を先導された偉大な先輩方を相次いで失う年となりました。平成31年1月27日には、初代入射器系主幹の田中治郎先生がご逝去されました。また同年1月31日には、初代PF施設長の高良和武先生がご逝去されました。年号が代わって令和元年の9月20日には、初代測定器系主幹、2代目PF施設長の佐々木泰三先生がご逝去されました。謹んで3名の先生方のご冥福をお祈りいたします。

本号では、佐々木先生に縁の深い宮原恒昱先生、小出常晴先生から、佐々木先生を偲ぶ心のこもった追悼文を寄稿していただきました。ぜひご一読いただければと思います。佐々木先生のご功績は、原子分子科学、固体物性分野におけるパイオニア的な研究から、真空紫外・軟X線分光の計測技術開発、加速器施設の設計・建設・運営など極めて幅広いのですが、この「PFニュース」を開始するにあたって、大変重要な役割を果たされています。PFニュースの創刊号（1983年6月発行）には、初代測定器系主幹として、佐々木先生の挨拶文「フォトン・ファクトリー・ニュース創刊にあたって」が掲載されています。2012年に私が初めて放射光科学第二研究系の主幹として寄稿した「放射光科学第一・第二研究系の現状」でも触れさせていただいているのですが、この文章を改めて以下に引用させていただきます。

放射光実験施設（フォトン・ファクトリー）は昭和57年に運転を開始し、すでに多くの研究成果を生み出しつつあります。昭和58年度はいよいよ一般公開による共同利用実験を開始する運びとなり、一段と多くの研究者が実験のために来所される見込みです。このたび登刊されることになりました「Photon Factory News」は現在および将来のユーザーに、フォトン・ファクトリーでの放射光利用研究の実施、あるいは計画に役立つ情報を出来るだけ早くお届けしようとするものです。このニュースはとりあえず、来る6、7月の共同利用実験の開始を前に当面ユーザーにとって一番関心の深いことから、急いでお伝えする、というところから出発します。いずれ、入射器と光源の運転、測定器やビーム・ライン等の整備状況、共同利用の実務的な知識、研究、R&Dに関する情報等、内容を逐次充実していくと編集スタッフは張り切っています。PFからユーザーへの情報の流れとならんで、ユーザーからの意見、要望、提案等をお寄せいただければより充実したものになるでしょう。この点でユーザーの皆さんの積極的な参加、協力をお願いします。従来、PF懇談会の発行する「PF通信」

は、フォトン・ファクトリーの計画段階から建設の情報をユーザーに伝えるメディアとして貴重な貢献をしてきました。しかしPFが完成して活発で多彩な研究活動が展開しつつあるいま、伝達を求められる情報の量とスピードとが別の対応を私共にせまっています。ユーザーとPF所員とが協力して、情報の発生現場で編集作業をし、ユーザーの研究活動の実務的なお手伝いをするというのがPF Newsの主な役割であると私共は考えています。「PF通信」と「PFニュース」とが役割を分担して共存するか、どちらかに統一されるか、しばらく推移を見まもりたいと思います。このニュースの発行は58年3月下旬のX線関係のUser's Meetingでの討論にもとづいて具体化しました。関係各位の熱意と御尽力に心からお礼申し上げます。

昭和58年5月17日

昭和57年（1982年）に運転を開始し、最初の共同利用実験をまさに開始しようとしている昭和58年（1983年）の5月に書かれたこの文章は、PF黎明期の様子を伝えてくれる非常に貴重な資料です。共同利用実験の開始に向けて、熱気にあふれるユーザーとPFスタッフが、お互いのコミュニケーション・ツールとしてのPFニュースを創刊しようという心意気が、この佐々木先生の文章からひしひしと伝わってくると思います。

PFの共同利用開始からすでに約40年が経過し、大型施設や大学共同利用機関をめぐる様々な環境は大きく変わってきているのはご承知の通りです。現在のPFの限られたリソースの中で、PFとしてできること、優先してやるべきことは、着実に見直してゆく必要があります。一方で、月日が経っても変わらず重要なこと、例えば「将来につながる研究の芽を育てること」、「将来を担う人を育てること」は変わらず大切にしたいと、改めて感じます。ちなみにPFニュース創刊号における佐々木先生の文章で、「58年3月下旬のX線関係のUser's Meetingでの討論にもとづいて」のくだりについては、PFニュースのバックナンバーのPF30周年特集号（Vol.30, No.1）で、坂部知平先生、藤井保彦先生、宮原恒昱先生がその顛末を詳しく紹介されていますので、ご興味のある方はこちらもぜひご覧ください（http://pfwww.kek.jp/publications/pfnews/30_1/30_1.html）。